

ある不登校事例をめぐる多声的ライフストーリー

— 羅生門的手法による検討 —

Poliphonic life story over a case of non-attendance at school:
Application of *Rashomon*-like technique

持田 隆平 (Ryuhei Mochida) 指導: 根ヶ山 光一

【問題と目的】

本研究の目的は、ある特定の不登校を複数の関係者がそれぞれどのように受けとめていたか比較することである。その際、羅生門的手法 (Lewis, 1959/2003, 1961/1986) を方法論として採用した。特に、不登校の原因と立ち直る過程に関し、立場による語りの異同を比較検討した。

【方 法】

本研究には高度の倫理的配慮が必要であるため、筆者 (以下、不登校者) 自身の不登校体験 (小学校3～4年生次の2年間) を対象事例とすることにした。

面接対象者: 不登校者の家族 (父、母、姉、妹、祖父)、親戚、不登校時の担任教諭、クラスメイト、友人の計9名。

調査期間: 2009年8月～2011年10月。

手続き: 自由連想的に当時のことで覚えていたことを話してもらい、その後半構造化面接を実施 (個別に約1時間30分)。許可を得て録音し、逐語録を作成した。

分析方法: 「どうして不登校になったのか」「どのようにして立ち直ったのか」という観点から抽出された各対象者の語りの内容を比較検討した。

【結果および考察】

不登校の原因をめぐる認識の多様性 (Table 1)

原因について全体で17の要因が挙げられた。複数の要因を回答した対象者がいるものの、単一の不登校事例に対して、これだけの数の原因が考えられたということは注目に値する。

全対象者のなかで不登校者 (= 筆者) と同じ認識を示したのは教諭のみであった。不登校者はトラウマ的な体験があったことが不登校に結びついたと認識しているが、妹と祖父以外の対象者はそのような特定の出来事ではなく、生活環境など背景的な要因を挙げていた。なお、妹は6歳前後であったために当時の記憶があまりないと語り、祖父は加齢による回想の困難という問題を抱えていた。親戚は学校での不登校者の様子は全く知らなかったと思われ、一般論と不登校者の性格など客観的に得られた情報とを交えて説明していた。友人も習い事や家族の雰囲気など客観的に不登校者の家庭を眺めた者として考えられることに言及しており、進級時の不適応について言及した唯一の対象者であった。教諭は母親とコミュニケーションが取れていたことと自らも母親であるという立場から、実は母親自身も本家の跡取りを育てる身として期待される立場にいたことを指摘した数少ない対象者であった。

父、母、親戚など学校での様子を知らないものは教師との相性など学校でトラブルがあったのではと想像している様子も見受けられる。特に父は、不登校の前後で遊び友達が変わったことから、友人間でトラブルがあったのではと考えている。しかし、友人と教諭の認識では、友人関係にトラブルはなく不登校後の同級生の反応からもむしろ慕われていたという事実が浮かび上がった。さらに、研究全体で結果的に自分自身に原因帰属しているのは、受験勉強をさせ過ぎたと述べた父とPTA職の依頼を断る口述を得る為に受験をさせたと言った母だけであった。そのため、多くの対象者が自身には非がないという認識を有していることも示唆された。

立ち直りの過程をめぐる認識の多様性 (Table 2)

転機について5、立ち直る過程について7の認識ヴァリエーションが示された。

父と教諭が不登校者本人の行動と様子の变化から転機を捉えているのに対し、母は自らの行動そのものが不登校の転機であると認識している。一方で不登校者の家族の多くは外部の援助

者の存在の大きさに言及しており、特に重要な役割を果たしていた人物として、当時不登校者の家に通っていた大工の存在を挙げている。

何をもって立ち直ったと判断したかについて、時期やきっかけの捉え方は言及した対象者全員が異なる見解を示していた。とくに家族は、不登校者が学校に復帰した後も数年に渡り再発の不安を抱えていることが示唆された。一方、親戚と教諭は不登校の最中から小学校卒業までの間に立ち直ったと判断したことが窺えた。父、母、姉は学校に登校し続けている様子を根拠に立ち直ったと判断を下していたことが示唆され、確信が持てるまでに時間がかかっていることから、家族はより慎重に判断していたと思われる。

立ち直りの過程をめぐるのは、各対象者が不登校者と直接関与した際に感じ取ることができた印象を基に説明がなされている様子が見受けられた。それは、推測をもって説明されることが多々見られた原因の認識のなされ方とは大きく異なる点であった。また、そのことが立ち直る過程において各々が異なる解釈を示した要因であると考えられる。

多様な認識のなされ方は何を意味するか

本研究の結果で特徴的であったのは、状況や個人的特徴だけではなく、家柄の重圧という「実体のない事柄」に対して原因帰属する者が多かった点である。地縁や血縁といった家庭の内情を知る者にとって、家柄という理由づけは誰もが納得できるものであったと考えられる。

このことは、不登校の原因を特定の個人に帰属させて非難するのではなく、家柄やしがらみという抽象度の高いところに帰属させていたことを示している。そうすることで、コミュニティ内の関係性の維持をはかっていたと推察される。換言すれば、同じネットワークに生きる者同士の「合理化」(Freud, 1936) によって関係の継続を図るという、「側隠の情」とでもいうべき機制が働いたと考えられる。

Table 1 原因に関する認識のヴァリエーション

番号	カテゴリ	ヴァリエーション	本人	父	母	姉	妹	祖父	親戚	友人	クラスメイト	教諭
1	意見	親が過保護であった				○						
2		教育方針							○			
3		家のなかでのプレッシャー		○		○						
4	家柄	受験勉強		○	○							
5		親もプレッシャーを感じていた		○	○							○
6		悪まれているが故の葛藤								○		
7		親の期待								○		○
8	家柄	学校でプレッシャーが掛けられていた		○	○	○						
9		2年次の教師との相性			○							
10	人間関係	友人関係		○								
11		一般論							○			
12	本人	教師の専門職化										
13		進級時の不適応								○		
14	本人	トラウマ	○									○
15		本人の性格		○	○				○	○		
16		病气					○					
17		学校嫌い							○			
17	その他	わからない							○			

Table 2 立ち直りの過程に関する認識のヴァリエーション

番号	カテゴリ	ヴァリエーション	本人	父	母	姉	妹	祖父	親戚	友人	クラスメイト	教諭
1	転機	家族旅行で外出ができた	○									
2		外出できるようになった		○								
3		放課後登校時に声をかけても逃げなかった				○						○
4		自ら行動を起こした										
5	人間	大工の存在		○	○	○	○	○		○		
6		不登校なのに目が生き生きしていた								○		
7	不登校中	不登校中に道徳指導教室に通うようになった					○					
8		再登校できたこと		○								
9	直ったと判断	学校で新しいクラスに馴染んだ姿を見て										○
10		部活をやり返き中学を卒業したこと		○								
11	高学年	部活に励む姿を見て					○					
12		現在			○							